

Progress in the management of pregnancy in patients with neuromyelitis optica spectrum disorder

Yuko Shimizu, Ryotaro Ikeguchi, Kazuo Fujihara, Kenichi Todo

Therapeutic Advances in Neurological Disorders

First published online October 27, 2025 doi/10.1177/17562864251384504

視神経脊髄炎関連疾患（neuromyelitis optica spectrum disorder : NMOSD）は、アクアポリン 4（aquaporin-4 : AQP4）に対する自己抗体が陽性となるアストロサイトパチーであり、主に妊娠可能年齢の女性に好発する。多発性硬化症（multiple sclerosis : MS）と比較して、NMOSD では産褥期に重篤かつ不可逆的な再発のリスクが高く、妊娠は患者にとって重要なライフイベントである。

本邦では、かつて免疫抑制薬は妊娠可能な女性に禁忌とされていたため、多くの NMOSD 女性患者が妊娠を断念、または妊活前に本治療を中断し再発を来す状況であった。その後、アザチオプリン、タクロリムス、シクロスポリンは「妊婦等に関する禁忌」が解除となり、近年 5 種類のモノクローナル抗体製剤が NMOSD の保険適用となった。この目覚ましい治療の進歩により、NMOSD の治療選択肢が拡大し、安心して妊娠・出産に臨める環境が整いつつある。

良好な妊娠・出産転帰を得るためには、個々の症例に応じたエビデンスに基づく治療計画の策定が重要である。特に、モノクローナル抗体製剤の妊婦への安全性や胎児の影響を評価するためには、shared decision-making と症例の蓄積が不可欠である。

本総説では、妊娠可能年齢の NMOSD 患者の妊娠計画、産褥期管理、授乳期対応に関する最新の知見のみならず、AQP4 抗体陰性 NMOSD および抗 MOG 抗体関連疾患を含めた疾患コントロールと育児希望の両立を目指した協働的医療の重要性を論じる。